時に、一隅の卓子から、衝と立つて中央へ割つて入つた者がある。

水髪のつぶし島田、粋な小紋の据模様、色の抜けるほど白い、最前の藝妓であつた。

『まア皆さん、靜かになさいよ、こんなところで腕立ては紫痴ちやアないの！』と左の手で光正の手を取つて、わが身を以て庇護ふやうにぐつと寄添ひ、切れの長いすゞしい目に、對手の男どもをジッと見据ゑた。

高い鼻、秀でた眉、キッと結んだ朱唇に、男優りの負けぬ氣を見せて居る。

〔五五〕

采女町の唯有る新道に、近頃出來た茶路といふ待合茶屋の奥まりし小座敷に、グッスリと眠つた光正は、醉ひざめの渴を覺えて不圖目を覺ますと青色い紗の掩ひをかけた電燈の下に、派出な友禪ちりめんの掻い卷きにくるまつて、のび〳〵と臥て居る自分を發見したのである。

ハット思つて枕を欹てると今度は枕下に悄然と坐つて居る婦人を發見した。

『オヤ、御前お目覺めでございますか』

婦人は、急に此方を向いて、ニッコリと笑ふ。

『エ？』

と、光正は肱を立てゝ、やをら半身を起したが、まだ頭がフラ〳〵するので、すぐに前額を枕に押付けた。

『御氣分がお不盡いのでございますか、まアお冷水を一つめしあがれナ』

銀の水差がカチリと玻璃に觸れる音がして、岩間にむせぶ清水かとチョロ〳〵と微妙なひゞきが光正の耳に私語く樣に聞えた。

『さ、めしあがれ』と木地塗りの盆にのせてさし寄せる。

『ありがたう』と光正は一と口呑んだが、熱した口に清冽な冷水の味ひ得もいはれず、あとはグッと一息に良して、

『モウ一つ』と、所望しつゝ、婦人が再び水を注ぐ間を、じつと目を冥つて此場の仕宜を考へて見た。

邸で駒田にすゝめられ、平素はあまり嗜まぬウヰスキーを飲んで、甲斐澤を伴れて蒲田の梅屋敷へ行つた。そして、その歸返に自動車がバンクして、その修繕を待つ間をカフエーで又飲んだ、それから……と其の跡を考へる時、

『御前お冷水ー オホ、、、、まだお眠むいのでございますか』と婦人は馴々しい調子。

光正も餘儀無げに微笑つて、二度目の水を半ば呑んで、コップを措いた。

『ほんたうに、よくお眠ッておいでゞございましたこと』

『斯ういふ間に、婦人は手ばしこく金口を一本吸ひつけて、

『まア御一服遊ばせよ』と行屆いた欵待ぶり。斯うした場合に馴れぬ光正はたゞ

『難有う』とばかり、その煙草を受取つたが、吸ひもやらず考へ込むのであつた。

『ホ、、、、御前、どう遊ばしたのでございます。大層お考へ込みですわねエ。ホ

ホ、、』と、婦人は笑つた。

光正は又已むを得ぬげに苦笑したが、やをら蒲團の上に起直つた。見ると、いつの間にか、お召の丹前に、フランネルを襲ねた寢間着を着てゐる。

『どうも甚く醉つたので……』と、光正は半ば獨語のやうに分疏らしくいひながら卷煙草を一と吸ひ吸つた。

『まつたく！ 隨分醉つて被居しッたこと』と、婦人は請て、又ニッコリする。

『わたしは判然記憶はないが、どうして恁ういふところへ來たか、だいぶ厄介をかけたやうにも思はれるが……』と、光正は自ら訝りつゝ珍らしさうに四邊を顧ろと電燈の灯影微暗き床の間に、誰が筆か白梅の枝を斜めに畫幅の南山壽星が笑つて居た。

〔五六〕

さしも志操の堅實と品行の方正とを以て同族間に聞こえた氷室光正伯も、去んぬる梅見の歸るさに、菊大和の照葉と呼ぶ新橋藝妓に邂逅てからは、日毎夜毎の待合這入り、むかしに變つた行狀である。

家政はもとよりいはずもがな、あれほど熱中してゐた炭鑛事業さへ近頃は全く駒田家令に一任せ去つて省みもせぬ、切角米國で調べて來た研究上の書類の如きも、空しくトランクの底へ押込んだまゝ、開けて見やうともせず酒に醉うては邸を外！

今日も午後から運轉手の木村に自動車の準備をさせて、例の如く新橋へ出かけやうと、居間を出て庭傳ひに正門の方へ歩みを運ぶのであつた。

暑さも寒さも彼岸までと、彼時からまだ一ト月とは經たぬ間に、めッきりと春めいて、庭の一重櫻もチラホラと咲ひ初め、玉蘭やら木蓮やら、いろ〳〵な灌木が美しい花を着けてゐる。

『春だナ』と、光正は思はず歩みを停めて、花の梢を見上げるのであつた。

と傍らの雪見燈籠の陰に頻り〳〵草を除つて居た老人が、それを見ると怖る〳〵進み出て、恭々しく額づいた、それは門番の佐兵衛であつた。

『オ、、爺か精が出るの』と、光正は、いつでも目下の者に優しいのであつた。

『はい恐入りますでございます』と、佐兵衛は恐縮する。

『併し、いつも達者で結構だナ、芳造は甚麽した、その後別に消息は無いかの』と光正は優しく問ふ。

『はい』と、佐兵衛は悄れ聲。

『さうか』と、光正も思ひを妻子の上に走せたが、淋しさうな顏色をしたが、急にまた元氣よく。

『イヤ、そのうちに消息もあらう。それよりも、爺はいつも變りが無くて何よりだナ』と、慰め顏にいふのであつた。

『はい、御もつたい無いお詞でございます。お高庇樣をもちまして、爺奴に變りもございませぬが……』と、微醺を帶べる光正の面を見上げて、

『御前樣、あなた樣は甚うお變り遊ばしましてございますなア』と、老いの眼に暗

涙をさへ浮かめた。

『エ？』と、いつたが光正は、衷心忸怩たるもの無きを得なかつたが、横を向いて密つと吐息を吻いた。

『御門番風情の私が、斯樣な儀を申上げましては、失禮とお咎めもございませうが此頃の御行迹は……』と、いひかけて唾を呑んだが『お邸においでの時も、どうやら御酒ばかりめしあがつておいでの御樣子、その上毎日何處やらで夜更しを遊ばして、お歸邸は例も御酩酊で、夜更さふけの二時、三時、イエ、いか樣に遲くなりましたとて、たとへ爺は寢ずに居りましても、それは御門番の役目でござりますからそれが艱さに申上げますのではございません。大殿樣の御代から、四十年も御門番を勤めて居りますが、近頃のやうなことは嚆矢でございますで、もしお身體に障りましてはと、お案じ申上げてのことでございます。お見上げ申せば今日もお出掛けでございますか』と氣盡はしさうに眉を顰める。

『イヤ決して心配には及ばん。今夜は成るべく早く歸つて來ることにしやう。爺の

心切は禮を云ふよ』と光正は敢て逆らひもせぬ。

『左、左樣に仰有られましては爺奴何んとも申上げやうがございません。が、數ならぬものではございますが、老人の心の安まりまするやう、セメテ今晩はお邸にお在宿が願はれませんでございませうか』

『……』

『斯樣に申上げますると、いかにも圖に乘りまして、出過ぎたことを申上げるやうで恐れ入りまするが、亞米利加とか、らお歸朝遊ばしてから、全然御用はお捨ておきで……イエ、それはモウ、長の御旅行でおつかれでもございませうが、まだ一度もお鑛山の方へもお巡視りも遊ばされず、どうも爺奴は心配でならぬのでございます』と、眞實を面に現して、佐兵衛は主を諫めるのであつた。

〔五七〕

佐兵衛が主思ひの律義まッぽうな心から、眞心こめて諷諫めるのを、光正は頻にうなづいて、

『アノ爺や、よく解つた、お前の詞は仇には聞かん、が、今日は他に用事もあるから、どうか快く出しておくれ、成るべく早く歸邸つて來るから』と、あくまでも逆はず、そのまゝ其處を去らうとするのを、佐兵衛は倉皇てゝ外套の裾を引止め。

『御前樣ッ老人に氣をもますまいと、おやさしく被有つて下さいますのは難有うはございますが、お口ばかりではドウモ安心が出來ません。ど、どうぞ今日はお邸に……』と、尙ほ引止めやうとした時、切戸口から木村運轉手が入つて來て、

『御前、先刻からお待ち申上げて居ります』と、小腰をかゞめるのであつた。

『然うか』と、光正は輕くうなづいたが、佐兵衛を顧みて、

『爺、ぢきに歸邸つて來るから其處を放せ』と、取られた裾を拂はうとしたが、佐兵衛いッかな放さうとはしない。

『左、左樣でもございませうが……』

と、尙も執拗に賽縁るので、光正はサッと不快の顏色を作したが、すぐ思ひ直して、

『さ、放してくれ』と、優しくいつて、

『直ぐに後から行くから』と木村を顧みる。

『はッ、デハ、どうぞお早く』と、木村は意を領して門の方へ引返す。

『あゝして自動車の準備も出來て居るのだから』と、光正は取られた裾を拂つて、一と歩踏出す。

『御前樣ッ』と佐兵衛は猶も追ひ縋つて、

『御、御前樣、デハ爺奴のお願ひは、どうあつてもお聽き濟み下されませぬのでございますか』と、怨めしさうに、顏を見上げる。

『イヤ、決して爺の詞は用ゐんといふのではないが、あゝして自動車の準備も出來て、木村も待つて居るのだから……』と、光正も稍持て扱かつた爲體である。

『たとへお自動車のお準備は出來て居りませうとも、御外出をお見合はせ遊ばすに

何んの不都合がございませう。御前樣ッ今日はお彼岸と申し第一貴君、どなたのお日柄だとおぼしめすのでございます。月こそ違へ御先代大殿樣の御逮夜ではございませんか。イエ、それもお宜しうございます。御用事とあれば致し方もございませんが、あなた樣のやう、さう御酒ばかりめしあがりましては、全くお身體が堪ちません。それゆゑ爺奴は御無禮をも顧みず、此の樣にお止め申上げるのでございます』

『難有う、お前の志は嬉しく思ふ。が、爺酒でも飲んで醉ひでもせねば、光正には心の苦痛を忘れる術かない』と、光正は歎息する。

『そ、その御心痛と仰有いますのは、令夫人のお家出のことでございませう』

『む？』

『その事なれば、どうも爺の腑に落ちかねまする。アノ物固い正司樣や御貞心の深い令夫人が、何のマア大それた、不義の密通のと申すことがございませう。

と、佐兵衛は此處ぞ一生懸命の顏色。

『エッ、それでは爺は其の秘密を知つて居つたか』と、愕く光正、

『知、知らいで何ういたしませう、何んぼお隱し遊ばしても、爺はよう存じて居ります。が、是れには何んぞアヤ●●がございませうと此の爺奴は黑い目で睨んで居るのでございます』と、なほも何事をか言はうとした時、物陰からツカツカと進み出たのは家令の駒田堅策であつた。

『オー、御家令樣』と、佐兵衛は折あし、といはぬばかりに眉をひそめた。

『こら佐兵衛ッ、何だ汝は門番風情の分際で、御前樣に直々お話しかけ申すなどは無禮といふことを知らんのか、あッちへ行け〳〵ッ』と叱りつけて『御前、あまり下々にお優しく遊ばして、お甘やかし遊ばし過ぎますで、斯樣に身の程も辨へず狎れ〳〵しく致すのでございます。チョッ、まだ行かんか、早く行けッ、エ、ッ行けといふにッ』と、堅策は尖げ〳〵しく叱り咤る。

『老人だから許してやつて下さい。佐兵衛も餘り心配するな』と光正はこれを機に門の方へ立さるのであつた。

〔五八〕

光正が出て行くのを見ると、佐兵衛は殆ど我れを忘れて、

『アレッ御前様』と呼びかけつゝ、追はうとしたが、追はせもやらず堅策が、猿臂をのべて、襟髪を無手とつかみ、力を極めて引もどした。引もどされて佐兵衛はパッタリと尻居に倒されたが、痛さを怺へて再び起たうとした時には、門外に自動車のひゞき高く、光正は既う出掛けて了つた。

『ア、』と、ばかり、佐兵衛は望みを失つて、そのまゝベッタリと坐つて了ふ。

堅策は鋭い目に、注意ぶかく四邊を見まはしたが、

『佐兵衛ッ實に汝は見かけによらん太い奴だなッ』

『何、何、何んでございますッ。い、、いつ私が太い事をいたしました』

『何んだ、いつ太いことをしたと？それが太いといふのだ。イヤサ、それが太て太

てしいといふのだッ』

『何、何んでございますッて』

『こらッ、佐兵衛ッ、今チラリと耳に入つたが、汝夫人と正司殿の不義の秘密を知つてゐるなッ』

『……』

『やい老惚れッ、いはゞ大切なお家の秘密を、汝風情が何うして知つたッ』

『ど、どうも斯うもございません。先般御前様が久々でお歸邸遊ばした時、お喜びを申上げやうとお居室の方へまゐりました時、あなたから御前様へお話しの樣子を……』

『立聞きをしたといふのだらうなッ』

『立、立聞きをいたす氣ではありませんが、丁度そこへ行きあはせたので……』

『いふ勿ッ、そんな分疏けは聞くに及ばん、どうも近頃、お奥で屢々御紛失物があるので、不思議なことだと思うて居つたが、汝が折々お奥へ忍んで、盗み出すに

違ひない、實に汝は太い奴だッ』

『も、もし御家令様、ものには言うてよい事と、わるい事がございます。と、と、飛んでもない、いつ私が盗みをいたしました。イイエ、いつの何日に此の佐兵衛が泥棒を働きました。御先代様以來四十年このかた、何んの取柄もございませんが唯々正直一圖にお邸に勤めまして、これまで何一つ不都合のない此の佐兵衛に盗人の汚名をおきせなさるとは、そ、そ、そりや胴慾と申すものでございます』

と、佐兵衛は且つ怒り且つ泣くのである。

『フ、、、、、盗人猛々しいとは汝の事だ。ム、、事によると夫人と御舎弟の不義の取持をしたのは、佐兵衛、汝に違ひあるまいッ』と堅策は疊みかける。

『不、不、不義の取持ですつて』と、佐兵衛はいよ〳〵激して、舌も硬ばり、次の句が次げぬのである。

『どうだ、分疏はあるまいッ、實に言語に絶した大盗人だッ』

『ぬ、ぬ、盗人だとッ……。』

『盗人に違ひないから盗人といふのだ、第一見ろッ、現在汝の悴の芳造は甚麼だッイヤ、親子の血統は爭はれんものだなア、は、、は、』堅策は憎さげに笑ふ。

佐兵衛は無念の拳を握つて、齒茎を喰ひ〆め身を顫はす。

『全體芳造が監獄へ行つた時、汝も疾うに暇を出すべき奴ではあつたが、お上がお慈悲深くいらせられるから、今日まで首がつながッて居つたのだ。モウ今日といふ今日は、此の駒田氷室家の家令たる役儀の表、見のがすことは斷じて成らん、唯今限り放逐するッ』

『エッ、放逐？……』

『さうだ、今日かぎり永の暇をくれてやるッ足元の明るいうちにトットと邸を出て失せいッ』と、情け容赦も荒々しく佐兵衛の肩の邊を強く蹴つた。

老いて非力な佐兵衛も、口を極めて罵しられ、剰さへ一度ならず足下にかけられムラ〳〵として我れを忘れて堅策へ武者振りついた。

『エ、ッ抵抗するかッ』と、突放すのを、再び起つてつかみかゝらうとした時、烈

しく胸部を蹴られて、

『呀ッ』と一聲悲鳴を揚げたが佐兵衛は其場に血反吐を吐いて撞と倒れた。

〔五九〕

『御前、だいぶ此頃はお手がお上達りになりましたわねエ』と二月堂形の食卓を中央にさしむかひの、照葉が頻りに酌をするのを、光正は、引うけ〳〵盛んに飲む。

『ですけれど御前、さう飲ッてはお毒になりはしませんか』と、さすがに照葉も猶豫ふのであつた。

『何有、大丈夫です』と、光正は猶ほ盃を措かぬ。

最愛の芙佐子や光人が家出をして此來、何の慰むる因もなく、氣も狂ふかと、我れながら危まる〻ばかり、憂慮ぎつ焦心つ煩悶えぬいて居たのであつたが不圖駒田にすゝめられて壺中の物の眞味を知つてからといふものは一刻も之し無かる可しず

と、間がな隙がな酒を呼んで、たゞ〳〵醉ひに醉ふばかり。

殊に、曩の夜銀座のカフエーで無頼漢、喧嘩を賣られた時、折よく傍に居合せて仲裁の勞を取つてくれた菊大和の照葉が、かよわい婦女の身で、鬼をも摑み挫ぐべき大の男を向ふへ廻して、微軀ともせぬ詰め開きに、新橋藝妓の張を見せた其の意氣が、光正の眼には珍らしくも凛々しく映つた。そして、泥の如く醉ひしれてゐる自分を待合の琴路へ伴つて、至らざるなき介抱を盡してくれたその親切、それもしみ〳〵嬉しく感じた。

剩さへその翌る日、甲斐澤を以て莫大な禮物を贈つたのに、ことごとく其れを固辭して、一錢半紙も受けなかつた照葉の態度が光正には實に立派に、實に美〳〵しく思はれた。

その折甲斐澤は斯ういつた。

『御前、實際恐入つたものです、賤業婦の賣春婦のと、惡口をいふものもございますが、それは一種の反感から來た毒罵——むしろ接近し得ぬもの〻負惜みです、

どうして〳〵、彼の照葉といふ藝妓の心事の立派サは、男子も慚るばかりで、あれ丈の世話をしておきながら、少しも恩に被せる樣子もなければ、もとより鼻に掛けるやうな氣振りもございません。斯うしたお禮を請やうなどゝは、夢にも豫想つては居りませんと、キッパリと辭退された時には、たゞ〳〵感服して了つたのでございます』と、それから又、斯うもいつた。

『斯うしたお禮を下さいますお志がございましたら、決して故意々々には及びません、御飯でもめしあがるお序でもおありの節には、チョク〳〵お聘せなすつて下さいまし、それが第一の藝妓冥利てございます。どうぞ此事を御前樣へ宜しう』と、

もとより豫じめ謀つた事で、それを傍聽した駒田家令も、詞を極めて激賞して『實に泥中の蓮花でございます』とまで褒めちぎつた。

初心な光正は駒田の詞を折紙でもつけられたやうに聽いて、すゝめられるまゝ、其夜甲斐澤を伴れて琴路へ行つた。さうして改めて照葉を聘んだ、他の藝妓も幾人か來た、すゝめ上手な照葉の酌に、その夜も光正はいたく醉ふた。

醉うては心の苦痛を忘れる、光正には其れが何より樂しみであつた。それ以來殆ど毎晩自動車を琴路へ駈つた。

時にはひどく醉ひ倒れて、奥の一と室に運ばれたのも知らず、ぐッすりと眠り入ることもあつたが併し目さへ覺めれば必ず歸邸る、一と夜としてそのまゝに泊り込むといふやうなことは曾てしない。

『新橋には惜しいお客樣！』

と琴路では女將をはじめ女中、風呂番の果に至るまで、然ういつて感心した。

が、照葉には其れが頼りなかつた。照葉に取つて物足りないのは其れであつた。それは駒田との約束――例の陰謀を遂行すべく事の成らぬを愁ふる爲めではなく、いつとはなしに光正に對する戀の芽がふいたのである。

〔六〇〕

『アラ、御前、モウお立ちでございますか』と、銚子の熱い燗を持つて來た琴路の女中が、びッくりしたやうな顔をするのを、酔眼に顧みて、

『自動車は待たしてあるだらうな』と光正は早立上る。

『はい、アノ、姐さんが歸してもいゝと仰有つたものでございますから……』と女中はモヂモヂする。

『ナニ、歸しても可いと……』と、光正の詞に冠せるやう、

『然矣！、わたしが歸して貰ひましたの』と照葉はッンと澄ます。

『そ、そりやア不可』と、光正は立つたまゝ眉を顰せる。

『いゝね、今夜といふ今夜は、わたし、どうあつてもお歸し申しません』と、照葉は立つて光正の腕を捉へたが、

『サア、もう一度坐つて下さい、いゝえ、いゝえ、お歸し申しません、どうしてもお歸し申すことじやアありませんッ』と力一ぱい引据ゑる。

『危険い、お放し』と、光正はよろ〳〵として、坐るともなく舊の座に着いた。照葉もペッタリ寄添つて。

『御前、あなたは何故然うなんでせうねエ』と、怨みを含んで顔を見上げた。

『ハ、、、今夜はお前も酔つて居るな』と光正は上半身をグラグラさせながら笑ふ。

『ね、、わたし酔ッてることよ。飲んだンですもの』と、照葉もだいぶ酔つて居る。

『素面ぢやア言はれぬウ事がアあアる、てンでせう。姐さんどうも御馳走さまッ』と、女中はたまらなさうに笑ふのである。光正はそれにも關はず、

『兎に角自動車を呼んでくれ、今夜は早く歸らんければならんから』と、光正は促く、其傍から『い、え、呼んぢやア駄目よ』と、照葉がうち消す。

『アラ、どうしたらよろしいのでせう』と、女中は中間に立つて困つた貌をする。

『無論呼ぶのだ、呼ばんければ歩いても歸る』と、光正は例になく廉の立つまでにキッパリと云ひ放す。

『え、、口惜しいッ』と、照葉は光正の膝に突ッ俯した。

『では、兎も角も電話をかけて見ませう。ですが、御前様、お歸り遊ばすにしても まだ御時間がいつもよりお早いではございませんか。まア一度あちらへおいで遊ばせな』と、女中は腰を浮かしながらも、照葉への手前まだ立ちかねてゐる。

『いや、まつたく今夜は急ぐのだ、實は出難いところを出て來たのだから……ナアニ、又明日ゆつくり來る。兎に角今夜は早く歸して貰はう』と光正はやゝ焦心て吸ひさしの金口を、グイと火鉢へ突ッこむのであつた。

女中は『それでも』とは云ひかねて、據ろなく立つて行く。

それを待ちかねたやう、照葉は勃如顔を擡げたが、ホンノリと紅を潮した顔にハラ〳〵と鬢の毛がかゝつて美しくも亦妍めかしい。

『あなた、どうあつてもお歸邸なさるんですか』と、今更めかくし念を押したが、光正の返詞も待たず、

『御前、そりやあなた、あンまりでございますわ』と、ばかり、再び膝に突ッ俯したが、聲を忍んで潸々と泣入るのであつた。

『ヤッ、お前……』と、光正は駭然と驚きの目を睜つて、然はさせじと爭ふ照葉の顔を、無理に押上げてさしのぞくと、慘ましいまで涙にぬれて居るのであつた。

怎麼したといふのか。』

光正もあまりの事に斯ういふ他に爲樣はなかつた。

『いやです〳〵、歸ッちや可厭ですッ』

照葉は物狂はしいやうに口走ッて、亂れた前髪や� とばかり、光正の胸に押宛てつゝ、身を顫はして歔欷あげた。

〔六一〕

近き頃氷室炭鑛に、新に入つた子供伴れの婦人があつた、幾多男女の坑夫に交つて、荒い仕事に追まはされてはゐるが、うち見たるところ手足も尋常で、むしろ綺羅にも堪へぬとの物腰、仲間の女に聞かれても、たゞ東京の者とばかり、口を禁ん

で素性を語らぬ。

今日も馴れぬ荒仕事に疲勞れ切つて、加之持病の胃痙攣さへさし發つたが、誰あつて看護するものとてもなく、ひとり痛む胸を押へつ、奥歯をキリ〳〵と噛み鳴らすまでに悩え惱む爲体は餘所の見る目も笑止である。

春とはいへど、山を深み、砂石を飛ばす風寒く、冠れる手拭ひを吹落された其の面を、唯見れば、其れは芙佐子であつた。

誰有らう、此の炭鑛の所有者で今を時めく氷室光正伯の令夫人が夫の名の下に經營さるゝ炭鑛に、賤しい業に從つて居るとは、寔に思ひも寄らぬ事といはざるを得ぬ。

縹緻の美いのは更にもいはず、同族の貴夫人間に、最も羨まれた綠の黑髮、それも塵埃に汚れ切つてありし、日の俤もなく、雪暖かき肌も石炭の粉に黑み、さしも豐滿かなりし双頰は憔悴れて、見るかげもなく變り果てたが、泣き腫らしては居るもの、、凜たるその眼は今も清らかに、たとへば秋の水を出づる芙蓉の如く氣高く

も美しく、一點の汚れも無い。

『お母ァ樣、〳〵』

切なさうな聲で斯う呼びながら彼方の岩蔭を廻つて、よろめきながら歩いて來たのは光人であつた。

破れ垢づいた筒袖の綿入れの裾を端折つて、草履も穿かぬ素足には、岩角で傷つたか、處々血が流れてゐる。

歩むによろめいたのも無理か、殆ど自分の身體ほどもあらうと思はれる大バケツに水を入れて、重たげに拿つて來るので、歩く毎に水は搖れて、下半身はグッショリと濡れてゐる。まアなんといふ悼しい姿であらう。

『お母ァさま、水を汲んで來ましたよ、サア、一つめしあがれ』と、光人は、喘々と息を切りながら、何處から持つて來たか、懷中から缺けた椀の蓋を大事さうに取出して、バケツの水を掬ひあげ、イザとて母に俯めるのであつた。

『坊や、あ、あ、難有うよ』と、芙佐子は光人のさし寄せた水を、ゴクリと飲んだ

が、深山の猿と痩せ細つた、我が子の手をジッと見ると、ハラ〳〵と涙を落して、其の手を引寄せ我が頬に押あてつゝ、身を顫はして咽び泣く。

『お母アさま、また痛いの、お母アさま、お母アさま』

光人は幼心の一圖に母の病ひを案じて、オロ〳〵涙に背後へ廻りやさしくも脊中を撫でゝ介抱する惨らしさに、芙佐子は怺ねず泣聲を揚げたが、人や聞くと手拭を咬メめて、光人を膝に抱き寄せ、頬摺りして、やゝしばし忍泣きに泣くのであつたがやう〳〵に涙を拂つて。

『坊や、光、光人さん、か、か、堪忍して下さいよ。何んでわたし達二人は此樣に不運なのでせうねエ』と、又さめ〴〵と咽び入つた。

〔六二〕

『やい〳〵、また手前はズルケて居やアがるな』と、いつの間に來たか母子の

前に立ちはだかつて、噛附くやうに罵しつたのは穴熊の源次と綽號を呼ばれる坑夫の小頭で、ゴマ鹽頭の赫ら顔、見るから憎々しい面がまへだ。

罵しられてハッとした芙佐子は光人をシッカリ抱寄せ、

『い、ね、決してズルケてゐる譯ではありません、があまり勞働が過ぎるものだから、持病の癪がさし込んで……』と、再び痛む胸を押へる。

『嘘僞をつけッ、そんな假病なんぞつかつても、めッたに休ませちやアやらねエから、さッさと彼方へ行つて働けッ』と、穴熊は顧で指す。

『でも、こ、こんなに痛むのだから……』と、芙佐子は前額からジリ〳〵と膏汗を流す、それほど痛みも募るので……。

『お母ア樣、痛いの、エ、痛いの？』と、光人は驚いて、膝を放れて背中へ廻り、また優しくも撫りかけるのを、

『ねいッ、ビイ〳〵いふなッ』と、穴熊は荒げなく足で蹴退ける。

『あれッ』と、光人は怖れて母の手に縋る。

『何、何をするのですッ』

と、病苦の裡にも芙佐子は許すまじき體で吃と成つた。

『なんだ、〳〵、横柄な口の利きやうをするなッ』と、穴熊は可怖い目に角を立てる。

『どうした〳〵』と、二三人荒くれた坑夫どもが寄つて來る。

『なアにの、阿魔があんまりズルケルから、叱言をいつてゐるところだ』

『此の女アお邸のレコちやアねエか』と、むさ、びの六藏といふのが腮でしやくる。

『さうよ、以前は奥方とか奥樣とかいはれた女よ。ダガの、いくらお邸の奥樣でも現在御前の弟と不義密通をした罪科で、斯うして鑛山へ遣されて、こんな苦しみをするといふものだ。醜態ア見るがい、、ハ、、、』と、穴熊は爲たり顔。

『いはゞ年貢の納め時か、まアうんと苦しんで見るがい、や』と、汚穢い舌をペロリと出したのは鐵槓杆の岩五郎といふ前科者だ。

『まア、お前方は、不義の密通のと、な、なにを失禮なことをいふのです』と、芙

佐子は口惜しさに身を戰かす。

『い、からさッさと働けよ、それが可嫌なら、駒田の旦那になびくがい、、ぐづぐづしやアがると今日も亦その餓鬼に飯を喰はせねエから然う思へッ』と、穴熊が嵩にかゝつて罵る時、

『どうだ、まだ身に浸みんと見ねるな』

聲の先に立現れたのは思ひもかけぬ駒田堅策であつた。其の後方には甲斐澤も居た。

『お、、駒田の旦那、唯今お着きでごぜエますか』と、穴熊は急にペコ〳〵叩頭をしたが、他の坑夫等に眼くばせして、早々其の場を立去らせた。

『おッ、お前は……』と芙佐子は颯と色を變へる。

『どうです夫人、鑛山は良い所でせうね。何しろ氷室伯爵家の無盡藏の寶庫ですからねエ、ハ、、、ハ、、』と、堅策は冷やかに笑つて『オイ源次、まだ剛情を張つてゐると見えるな』

『イヤモウ、手こずり切つて居りますよ、へイ』と、穴熊は頭を掻く。

『よく〳〵剛情な方ですなア』と、後の方から合槌を打つたのは甲斐澤だ、

『まつたく死太エ阿魔でさア』と、穴熊は今更のやうに美佐子を見る。

『退け〳〵ッ』、と堅策は穴熊を押退けて、

『オイ夫人』

『……』

『芙佐子ッ、モウい、加減に往生して諾といつたらどうだ』

『……』

『ム、、その顏色ぢやア、未だ諾とはいひさうもないな』と、堅策は溜息を吐く。

『いつそ手足を踏ン縛つて……』と、もどかしさうに云ひかける穴熊を、堅策は輕く叱つて、

『莫迦ッ、その位なら今まで斯うして待ちはせん。まア十分に苦しめて、心機一轉の日を待つとしやうよ。それまでは現狀維持だ、ハ、、、』と、堅策は悠然とし

て打笑つた。

〔六三〕

捕つた鼠を直には喰はず、しばらくは弄ぶ猫のやう、悠然として迫らぬ態の面憎さに芙佐子は切齒をするのであつた。

『此の調子ぢやア早速に承知をしさうもありません。どうです旦那、一つ此の餓鬼を締め上げて見ちやア』と、穴熊はむづ〳〵してゐる。

『さう、それも面白いかも知れんな』と、堅策は冷然と捨石に腰をおろして葉卷に火を點ける。

『やれ〳〵、大いにやるべしだッ』と、甲斐澤もけしかける。

『ドレ荒療治と出かけるかな』と、穴熊は其處等見廻して、手頃の木片を探し出して、腕だめしにビュー〳〵と二つ三つ風を切つて打ちおろした。

『あれッ』と芙佐子は色を失つて、犇と光人を抱寄せた。光人は柳島の折に懲りてか駒田の顔を見ると、口さへも利けず震へてゐる。

『それほどに可怖くば餓鬼に痛い目を見せねエうちに、ウンといッて駒田の旦那のいふことを聽くがいゝ、わるい事アいはねエから承知をしねエ、どうで無瑕瑾な身體ぢやアねエ、現在亭主の弟と乳繰合つた、いはゞ汚れた身體ぢやアねエか。エ、オイ、どうだッてンだ。チョッ、これでも手前、剛情を張りやアがるのかッ』と、穴熊は、やにはに左手を働かせて、放さじと爭ふ芙佐子の手から、光人を引ッ奪り、撞と地上に突き倒して、忽ち足下に踏み据ゑつゝ、

『さア、どうだ、否か應か、應なら好し、否と吐しやア引ッぱたくぞッ』と、さすが笞は充てぬけれど、蹂躙り〳〵、責め苛むその度に、光人は悲鳴を揚げて苦痛を愬へるのである。

『わ、わたしを打つて下さいッ』と芙佐子は一生懸命に穴熊を突退けて、身を以て我が子を庇護ひ、聲に泣かじと齒を切つて身を顫はす。

『然う吐かしやア』と、穴熊は持つたる木片を振り上げるのを、堅策はアナヤと制めて、

『待てッ女を打つて甚麼する。怪我でもさせたら取り返しがつかん』と、叱りつけ芙佐子に對つて、

『芙佐子、どうも未だ苦勞が身に浸みて居らんやうだな、まアまアモ一度考へて見るがいゝ、後刻に又會ひに來るから、それまでにようく思案をしておくがいゝだらう。但し一言斷つて置くが、此處に居るのは皆此の駒田の服心の者だ、逃げ隱れをしやうとしても、それは駄目だ。まア光人が可愛いいと思つたら色よい返詞をせねばなるまいよ。ふゝゝゝ』と、凄い笑を泛べたが、甲斐澤其の間に一度巡視つて來やう』と、先に立つて悠々と立去つた。

其の後影見えなくなるのを待ちかねて、芙佐子は光人を抱寄せ抱締め聲を限りに泣くのであつたが、やがて辭色共に決然として、

『光人さん、サア、母アと一しよに死にませう』

『エ、死ぬの！』と、光人は目を圓くする。

『然矣！』

『あたい死ぬのは可嫌だなア』と、光人は少し鼻聲に成る。

『そ、そりやア可嫌でせうとも、可嫌なのは道理ですがね、どうしても死なゝければならないのですからね』と、芙佐子は涙を雨と流す。

『だげど、死ぬとお父ウ樣にお目にかゝれないでせう？』と、光人は淋しい顏をする。

『芙佐子は身も世もあられぬ思ひで、又もやワッと泣聲を揚げたが、

『光人さん、もう何んにもいつて下さるな、たとへお父ウ樣にお目にかゝれないでも、母ア樣が一ッしよですから、ね、ね、おとなしく死んで下さい。自ら殺すさへ罪惡なのに、まして可愛い坊やまで殺さうとは……いゝえ、セメテ光人さんだけは殺したくないと思ふのですが、お父ウ樣はじめ駒田も、甲斐澤も、坊やを可愛いと思つてくれる人はないのですから、なまじ生殘つて苦勞をするより、何處

までも母子二人で逝きませうね、光人さん、解つて、ね、ね』と、頰に頰を打重ねしばらくは又涙にくれたが、人無き間にと思案を定め弱々心を鬼にして光人を抱き上げ、よろめきながらも立上つた。

〔六四〕

人の世のあらゆる侮辱と、あらゆる迫害とを加へられた芙佐子夫人は『悲慘』の二字は我等母子の爲めに設られたのかと思ふまでに、つくづくと世を儚み——否儚む』といふやうな、そんなナマやさしい詞では、到底現下の彼の女の心の中を寫し出すに足るべくもあらぬ。それはもう口にも筆にも現し得ない痛絶、悲絶のドン底に沈み果て、運命の神の指差す所、選むべき途は唯一條、曰く『死！』是れであつた。

蹌踉きながら光人をシカと抱いて、立寄つたのは十丈ばかりもあらうと見ゆる斷崖で、下には斷ゝず石炭を運ぶトロッコが通つて居る。

『死骸を他人に見られるのは口惜しいけれど、差當つて此處より他に死場所はない
、！』と、芙佐子は觀念の眼を閉ぢて、口の中に天に在す神の聖名を稱へつゝ、あ
わや身を躍らして飛ばうとした時、

『あッ、危ねえッ』

太く錆ある逞しい聲とともに、芙佐子の帶際を無手と摑んで、力に任せて引と
めたものがあつた。それは一人の坑夫であつたが、芙佐子は駒田等の方にのみ氣を
配つて、見つけられじとあせッて居たので、反對の側に此男が歩み近づくのを心着
かなかつたのである。

『ま、まア待ちなせエ、な、なんといふ亂暴なことをするんだ、見りやア小兒を抱
いてゐるがこんな處から飛び降りて死なうといふなア無分別にも程がある』と、
辛うじて引据ゑたが、母子の顏をさしのぞいて、忽ち滿面に驚きの色を漲らせつゝ、

『おッ、あ、あなたはお邸の令夫人ぢやアございませんか』

『エッ』と、芙佐子は思はず振仰ぐ。

『おゝ、やッぱり然うだ。令夫人に違エねエ、おゝ〳〵、あなたは若樣ぢやアござ
いませんか。こりやアまア、一體どうしたといふのでございます』と、且つ驚き
且つ怪しみ、母子の顏を七分三分に見比べて、たゞ息を喘ますのであつた。

芙佐子も餘りに其の男の態度が眞摯なのに動かされて、半ば不安の胸躍らせつゝ、
じッと見入れど、スッポりと被つた帽子が深いので頓には誰とも見解け難て、

『あなたは誰です』と、油斷なく光人を圍ふ。

『お見忘れなさいましたか』といひかけたが心着いて『おゝ、まだ被り物も除らね
エで……』と、あはたゞしく帽子を脱ぐと、色こそ黑くなつたけれど、太い眉尻
の黑子にも、見紛ふべくもあらぬ芳造であつた。

『おゝ、芳造ではありませんか』

『令夫人でございましたか、若樣もお身大きう……』といひさしたが芳造は、復不
思議さうに首を傾けて『それにしても此の有樣は甚事でございます。失禮ながら
伯爵樣の令夫人や若樣ともあらうあなた方が、そんなお身形をなさいまして、こ

んな所においでになるとは……』と、怪訝に堪へず茫然として『おらア夢を見てゐるンぢやアなからうか』と、平生に自ら不死身と誇るその鐵の如な腕を力の限り摑むで試た。

『お前の然うお思ひのも最もです、現在斯うしてゐるわたしすら夢現とも辨へないほどですものを……』と、芙佐子は新しく涙を落したが、問はるゝまゝにありし次第を、要を摘んで云々と語るのであつた。

〔六五〕

芙佐子が涙ながらに物語る一伍一什を、耳傾けて聞いて居た芳造は、事毎に驚異の目を睜つて、或は呆れ或は怒り、或は歎き或は悲しみ、面のあたり其の事に遭ふやうに堅唾を嚥むのであつたが、

『實にどうも意ひも寄らねエことばかりでございます。御前樣に然うしたふしだらがおあり遊ばさうとは、どうも私には信はれませんが、假りにさうした事があつたとしても、それは一時のお迷ひでまたお目のさめる時もございませうから、令夫人も決してお氣をお落し遊ばさねエ方が、宜しうございます。たゞ憎い奴は駒田の野郎……』と思はず拳を握り締めつゝ、その木村といふ運轉手も共謀になつて、令夫人をこんな處へ誘拐き出しやアがッて、斯うした御苦勞をおさせ申すとは、何んといふ太い奴でございませう、若樣もサゾお艱かッたでございませうによく御辛抱遊ばしました、ナアニわるい後は幸いと申しますから、決して御心配遊ばしますな。わたくしが生命に代へてもお救ひ出し申さねエぢやア措きません』と、頼もしげにいふのであつた。

『芳造、よくいつておくれだ、わたしは兎に角光人丈けは、是非助けてやつて下さい』と、芙佐子は手を合せて拜むのである。

『も、もッてエねエ』と、芳造も目をしば叩いて『申しおくれて居りましたが、芳造も不圖したことからグレ出して、長い月日を苦役に送り、親父をお世に成ッ

放して、申譯もございません。ところが日外正司樣にお目にかゝりましていろいろ御異見をいたゞきました上、正業に就く資本にしろと、お金子まで頂戴いたしましたので、同じ稼ぐ道ならば、同じくばお邸のお爲めに成りてエと、斯して此の鑛山へ入込みまして、坑夫に成つて根かぎり働いて居るのでございます。これもお邸の御恩や正司樣の御惠みに酬ひまする萬ケ一の御奉公でございますが、乾の舗に居りましたので、今日まで御目にかゝる折がございませんでした。だが、もう斯うお目にかゝつた上からは、時も移さず此處を出る思案をせねばなりませんが、ハテ、どういふことにしたものか』と、腕を拱む。

『どうぞ早く、こゝを逃げる工夫をして下さい、駒田も此處へ來て居るから、目に入ると難儀です』と、芙佐子は落着いて居られぬのである。

『宜しうございます。兎に角此場を立退きまして、彼方で御相談をいたしませう、が、お見受け申せばおからだの惡い御樣子、お徒歩になれますか』と、氣づかはしげに芳造は問ふ。

『大丈夫です、わたしはどうにか斯うにか歩けないことはありませんが、坊やは病上りの上年端の行かぬことですから……』と、芙佐子は又涙ぐむ。

『ナァニ令夫人、若樣ならば芳造が、おんぶをしてまゐります。さァ若樣』と、甲斐々々しくも脊中を向ければ、光人は嬉しさうに芳造の肩巾の廣い頑丈した脊中へ取りつくのであつた。芙佐子も嬉しく腰紐を解いて後から掛けてやる、芳造は其紐を胸でアやに取つて、シッカリと脊負つた時、先刻からの樣子を見張つて居たのか駈付けた穴熊の源次が、

『ヤイ、手前は芳の野郎だなッ、何だッて、その阿魔や子供を伴れて行かうとしやアがるんだ』

『オ、、小頭、お前、此のお方を知らねエのか』

『おらァ熟く知つてゐる、氷室伯爵の奥方よ』と、空うそぶく、

『何ッ』

『何もクソもあるものか、奥方だらうが、奥樣だらうが、そんな事にやァ頓着はね

エ、駒田の旦那に頼まれて窮命をさせるのだ』

『ちやア、手前も駒田に加擔をして居るンだなッ』

『知れたことよッ』

『ムヽ、さう吐かしやア承知がならねエ、うぬから先に叩ッ殺して、令夫人や若樣をお助け申してお邸への御恩報じをするんだ。覺悟しろッ』と、芳造は力士の如く突ッ立つた。

『しやらッ臭エことをいやアがるな。ヤーイ、みんな來い〳〵ッ』と、穴熊の呼ぶ聲につれて、最前のむさゝびゝ首め七八人の坑夫どもが駈付けて、芳造を中央に取籠めこゝに一場の格闘が始まつた。

〔六六〕

穴熊の源次をはじめ命知らずの坑夫等が手ン手に柄物を打ち揮つて叩き倒さんと

犇めくのでゐつたが、彼の芳造は光人を脊に負ひ、芙佐子夫人を庇護ひつゝ、鶴嘴を眞ッ向に振り翳して、必死の顏色物凄く、當るに任せて打ち倒すので看る〳〵中に二三人傷を負ふた。

『野郎、ふざけた眞似をしやアがるなッ』と、穴熊は懷中で居た短刀をキラリと拔いて、芳造の背後へ廻る。

『アレ、此方へ來たよ〳〵……』と、脊中の光人が氣を揉む。それは耳に入つたが芳造は振向く暇もなかッた。

『くたばれッ』と、穴熊が、突いて來たので、あはれ脇腹をグサとばかりに……。刺貫かれた、かと芙佐子はヒヤリと膽を冷したのであつたが、運の盡きは穴熊の方で、あまりに勢ひ込んだので石に躓き踣るのと、芳造が振りかへつて打ちおろす鶴嘴と全く同時で彼れは腦天を劈かれ、アッと一聲短刀を投出し、デモ二歩、三歩逃げかけたまゝ、そのまゝ其の場で即死した。

『やッ、なか〳〵手強いぞッ』と、むさゝびが氣をつけると、

『合點だッ』と、殘る奴等は、颯と退いて遠卷に隙をうかゞふ。

芳造は血を見たので、いよ〳〵ます〳〵氣が立つて近寄らば一擊の下に、息の根止めんと逸るのであつたが、光人が脊負ふた上、足手まとひの芙佐子も居る、光人だけなら慕地に敵中を突破して、逃げも走れもしやうけれど、足弱の病婦を伴れては然うもならぬ。

嗚呼、天は此の貞婦と俠僕と、而して可憐の小兒とを、むざ〳〵見殺しにするのであらうか？

『誰か來て下さいッ』

芙佐子が斯う叫んだのも、此場合あながち無理とはいはれまい。

が、さて誰が來て救はうぞ。

何をいふにも多勢に無勢だ、そのまゝ、時を移しては、敵に加勢が加はるか、此方が精力が盡きて了ふか、二つに一つは免れぬ、芳造の苦心は一方でない。

『令夫人、しッかり遊ばせッ。若樣、可怖ことはございません』と、纔かに力をつけるばかり。

兎角するうち心身ともに疲勞が來て、芳造の前額には膏汗が滲み出す。

もう、いつまでも斯うしては居られない、どの道倒れる位なちば一か八か、踏込んで逆擊には如かぬ、と芳造は肚裡に問ひ肚裡に答へて、おッと喚いて眞一文字に敵の中央へ躍り入つた。

其の爆彈の如き猛勢に驚き怖れて、さしも命知らずの坑夫ども、パッと飛退き路を開いた。

令夫人、早くッ』と、芳造は逸足出して駈拔ける。芙佐子も此處と一生懸命、おくれじものをと跡につゞく。

その亦跡から坑夫どもが、追ッて來る。

『令夫人、〳〵』

芳造は且走り且呼ぶのであつたが、男の歩と女の歩、もとより及ばう道理がない、立止つて待ち合はすと、もう群々と坑夫どもが寄つて來て、又遠卷きに取圍む。

芳造は氣が氣でない、再び敵中へ面も振らず飛込むで、渡り合ふ何分敵手が多勢なので右に拂ひ左に打ち芙佐子の方を顧みる餘裕がない。ト、此の時忽ち

『あれッ』

と裂帛の叫聲が聞えた。

『あッ』と、芳造は心驚さ、飛退ッて、唯見ると、いつの間に來たか駒田堅策が左手に芙佐子の咽喉を扼り、右手に短銃を差附けつゝ、甲斐澤を後に隨へ、凄い眼に此方を睨んで、

『芳造ッ、これでも猶抵抗をするかッ』と一喝した。

『ヤッ駒田ッ』と、いつたが芳造は二の句が次げぬ。

堅策は然もさうづと云はぬばかりに北叟笑んで、

『どうだ、吃驚したか、汝が一寸でも動いて見ろ、此の女の息の根は直ぐに止める神妙にしろ、神妙にしろッ』と人質取つて勝誇る。

『待、待ッて下せエ』と、芳造は我にもあらず、足を翹て、手を擧げて制したが

齒を嚙み鳴し身を震はし、悔恨の顏色凄じく吐息を吻いて、胸に据ゑつ柄物を棄て撞乎と大地に坐し、

『もう斯う成つちやァ仕方がねエ、決して手出しはしねエから、此の芳造を殺すなりと何うなりとして、令夫人や若樣の生命だけはお助け申しておくんなせエ』と觀念の眼を閉ぢた。

〔六七〕

心は矢竹に逸れども、大事の主を人質に取られて、如何とも力及ばず、身を投出した芳造を、駒田堅策は心地快げに打見やつて、

『ハ、、、、根が惡黨だけに、思ひ切りも早くてナカ〳〵詰せる、どうだこれから心を入れ替へて乃公の爲めに盡す心は無いか』といふ傍からむさゝびを打消すやうに、

『だつて旦那、現在此の野郎が源次大哥を殺しやアがつたんでごせエますせ！
『穴熊が死んだから、その代りに芳造を服心にしやうといふのだ』と堅策は事も無げに又芳造に打對つて、
『どうだ、芳造汝の膽ッ玉には見所がある。男は己れを知る者の爲めに死ぬるといふぞッ』
『ヘイ、お志しは有難うございますが、親父が大恩を受けて居る、お邸へ對してそんな眞似はまア出來ませんよ』と言下に芳造は斥けた。
『親父が大恩を受けて居る？然うか、汝は何んにも知らんと見えるな』
『何、あッしが何にも知らねエとは？』
『汝の親父の佐兵衛はナ、大恩を受けるどころか、伯爵の手にかゝつて横死を遂げたぞ』
『ねッ、な、なんですつて、親父が御前樣の手にかゝッて……？』
『然うだ、御前が餘り不品行を遊ばすので、御意見を申上たのを御立腹で、ひどく

御折檻なされたが、その時打ちどころが惡かつたので、佐兵衛は遂々死んで了つた唷、甲斐澤』
『然うです、ありやア實際可哀想なことをいたしましたなア』と甲斐澤が、眞實らしく相槌を打つ、
二人の詞をジッと聞いて居た芳造は、此時忽ち呵然として笑ひ出した。
『あッは、、、、、イヤ口が横に裂けたといつて、よく其んな嘘ッ八がいはれたもんだ、あんまり莫迦〳〵しくッて話しに成らねエ、オイ駒田さん、嘘もてエげエ休み〳〵いふがいゝせ、ハ、、、』
『なんだ、御家令の詞が嘘だといふのか』と、甲斐澤が進み出るのを芳造はジロリと見て、
『ソレ、その御家令といふ一言で、駒田の嘘の底、破れらア。先刻令夫人から伺へば、御前樣を諫めた爲め、お邸を永のお暇になつたといふことぢやアねエか』
『やッ』

『それを然うして相變らず、御家令然と斜にかまへて、お邸の書生の供を連れ、此の鑛山へ來て居るとはさッぱり解せねエ筋書だ』

『むゝッ』

『オイ駒田さん、イヤサ御家令、此の拔き差しァ出來めエがね』

『えゝ、ッつべこべと姦しいッ乃公に着くのが嫌なら罷せ、その代りには望み通りに殺してやるッ』と、言ひ負かされて堅策は、坑夫どもに目くばせする。

『そヲれ御覽なせエ、ダカラいはねエこッちやァござエやせん』と、むさいびは先見の明を誇るやうに鼻蠢かす。

『そんな事は孰うでも可い、早く其奴を片付けろッ』と、鋭い聲。

『ヤイ、野郎ッ駒田の旦那のお指圖だ、今生命を奪ってやるから念佛でも、題目でも、勝手に稱ッて覺悟をしろッ』

『やかましいやいッ覺悟は一度すりやァ澤山だッ』と、芳造はビクともせぬ。

此時、麓の方から爪先上り、石高路を、喘ぎ〳〵急ぎ足に此方を指して登って來る二人の男女があつた。が、此處に居合す者のうち、芙佐子の外には誰一人心着かなかつた。

〔六八〕

却説、魔ケ谿の底深く陷つて、はじめて駒田堅策の、憎むべき奸計を知り、十死のうちに活路を求めて、氷室家の厄難を救はうと、盡所知らぬ洞穴へ進み入つた正司は、行けども〳〵黑暗々たる岩窟で、或時は匍匐しつゝ辛うじて進み、或時は岐路を迷惑うて空しく無用の日を費し、獵犬エスを唯一の伴侶に、時には大いなる蝙蝠に脅かされ、時には無數の蛇の群に惱まされつゝも、猶且一歩も退かず、迂餘曲折、幾十里、幸ひにして身を傷らず、心は益々勇氣に滿ち充ち、暗中模索の日を經ること、茲に約そ四十餘日、此の日兎角して洞穴の奥を極めたのであつた。

嗚呼、洞穴は終に盡きた。途次節約に節約を加へて來た糧食も、既に數日前に全

く盡き果て居る。

蓄へた乾電池も使用ひ盡して光力の鈍い携帶電燈で、覺束なくも樣子を視ると、金輪際から生えた大盤石が前途を壓して、押せども突けども應へばこそ、最早一歩も進むべくもない。此處まで來るうち幾十百となき横穴はことゞく入つて見たがすべて夫は行止りか若しくは尺にも滿たぬ狹隘さで、人の通過し得べき由もない、いはゞ此處が此の洞穴の本道で、彼の洞口を正門とすれば、此れは正しく後門である。が、此處には開くべき門が無い。

物に屈せぬ道の正司も、是に至つて望みを失ひ、精も根も盡き果た。と、共に、自己の運命も盡きたのだと、正司は遂に覺悟を極めた。

『エス、もう駄目だ。乃公、汝も此處で死ぬのだ』

あはれ、絶望の聲を放つて、正司はあまたゝび浩歎した。

と、エスが何を思つたか、俄に宛然うろたへたやうに吠ゑ出して果は咬みつくかと思ふばかりけたゝましく吠ゑ立てるのである。

長く暗中に在つたので、正司も暗ながら薄々は物を見るに慣れたのであるが、今のエスの吠える目標は、果して何者に在るのか更に判らぬ。

『よし猛獸にせよ毒蛇にせよ、今更何を怖れやう！』と正司は微軀ともせぬのであつたが、エスは尙ほ吠ゑて、終には正司の外套の裾を咬へて、此方へ來よといはぬばかりに舊來し路へと引くのである。

『エス、何をするのだ、道が盡きたから跡へ戻れといふ事か、そりやア不可、もう食糧も何もない、戻るにも戻れんのだ、放せ、叱ッ、叱ッ』と、振放す。

振放しても尙懲りずまに、エスは幾度もゝ〳〵裾を咬へては、四足を踏張り力を極めて引戻さうとする。

正司も餘りの不思議さに心ならずも曳かるゝまゝに、道の程一丁餘り、舊來し路へ立戻つた。が、別に何んの變つたこともないので、

『エス、甚麼したのだ？』と、呆れて歩を止めた。

此時、百萬の雷が頭上に裂けたかと思ふばかりの凄じき音響とともに、正司もエ

スも五六間、彈き飛されたやうに踣り走つて將に轉ばんとしつゝ危くも踏止まつたが、思はず後を振り向いた正司は、何を發見したのか忽ち狂喜の聲を揚げて、

『エス〜活きたッ』と、絶叫ぶとひとしく、再び奥へ取つて返した。

見よ！今こゝで前途を塞いで居た千曳の巖は、一瞬の間に微塵と化つて跡も止めず濛〳〵として風に渦卷く爆藥の煙の隙間に、颯と一道の光線が射し入つて居るではないか！

〔六九〕

一度びは芳造の度胸に惚れて、わが腹心と爲やうとしたが、その飽迄も己れに屈せぬのを見て、却て憎惡の念を增した駒田堅策は

『えいッ面倒だ、一思ひに殺つて了へッ』と烈しい指圖を待ちかねたやうに、むさゝびは持ッたる鐵棒振翳して、芳造の素顏微塵になれと打下したが、芳造がヒラリ

と身を交したので、力餘つてむさゝびは、空しく大地を强く擊つて、腕も肩も挫くるかとばかりに痛みを感じ、あッと叫んで鐵棒を取落し、目も口も一處に寄せて、痛みに耐ねず呻吟るのであつた。

『こらッ汝、口では立派な事をいつて、まだ生命が惜しいのかッ』と、甲斐澤が構合から詰るのを、芳造は輕く笑みつゝ、

『なアに、どうせ捨てゝ生命だから、未練はチットモ無えけれど、殺し手に望みがある。此芳造はこんなケチな野郎の手にやア死にたくねエ』

『ど、ど、どうしたとッ』と、むさゝびは醜い顏を獅嚙めながら口を出す。堅策は其れには關はず、ジリ、と堅策の方へ膝をむけて、

『オイ駒田さん。面倒ながら同じことならば、お前さんの手にかけて殺ッて下せエ』と、手早く脊負ふた光人をおろして、自ら襟を押しくつろげつゝ我が手に我が胸を丁と打つて、

『さ、こゝんところを射つて下せエ』と、毅然として惡びれず、

『然うか、汝もやッぱり乃乃の手にかゝりたいのか』と、駒田の詞を甲斐澤が引ッ取ッて、

『親子とも御家令　手に死ぬとは、よく〳〵の因縁ですな』と、思はず迂乎と辷らした舌を引かせず、

『ム、、親子ともにと吐かしたな』と芳造は屹と眉を昂げて、

『その口吻で察しると、親父を殺したといふのは駒田だなッ』

『ムッ』

『然う聞いちやァ闇々と手前にやァ殺されねエ。ヤイ駒田ッ、うぬの生命は俺が貰つたッ』猛然として身を起した芳造は、再び鶴嘴を取って立ち向ッたが、

『えいッ、じたばたする勿ッ、這の人質が目に入らんかッ』と堅策は再び芙佐子へ銃口をさし向けたので、

『アッ令夫人ッ』とばかり芳造は、腕に満充た力も挫け、柄物を投げ棄て崩る、如く〳〵坐す。得たりと甲斐澤とむさゝびが、兩手を取つて左右から引据ゑた。

當下、一群の坑夫等が口々に、

『妖物だ〳〵ッ』

と絶叫びつゝ、雪崩を打つて逃げて來た。

『何んだ〳〵』

と、芳造を遠巻きにしてゐた坑夫ども、驚いて其の方に氣を奪られる。いかさま事有氣なので、

『甚麽したといふのかッ』と、堅策もそゞろに訝り問ふのであつた。

『だ、旦那、た、大變でございます。今しがた坑内で、行止りの一枚岩をダイナマイトで爆破ると、其の岩の裡から、人とも鬼とも判らぬ怪物が出て來たのでございます』と、坑夫の一人が、極端に驚愕に唇を紫色に變へて語る。

『あゝ、來た〳〵、山男だ〳〵ッ』と、坑夫等が又動搖めくので堅策も胸とゞろかせつゝ指さす方を望み見た。

但見る、群衆の後方から、人耶鬼耶、藍の如き面は、茫々と生え伸び、頭髪・髯

鬚とに半ば掩はれ、深く陷つた眼の光のみ烱々として物すさまじき、一個異形の怪物が、喜べるか怒れるか、足の踏所も定まらず、蹌々跟々として漂よふ如く歩み來る。その傍には、脊も肋も骨立ちて、狼かとも見ゆる、奇しき動物が、白き牙を剝露して、低く唸りつゝ、寄らば嚙まんと目を瞋らして隨いて來る。

大膽不敵の堅策も覺ゑず慄然として辟易いた。況して甲斐澤とむさゝびは、忽ち怖ゐて捉へた芳造の手を放ち、一塊りになつて立竦む。此の隙に芙佐子は堅策に取られた手を振切つて、芳造の傍へ駈寄つた。

それと全く同時であつた、幼心の怖々乍らも、次第に近づく件んの異人を驚異の眼に見て居た光人が、遽に躍り上るやうにして、

『やア叔父さんだ、〳〵、エスも來る〳〵』と驚喜の聲を揚げたのである。

『エッ、叔父樣？』と、のび上る芙佐子、芳造も目を刮つて見迎へたが、

『オ、、正司樣だ〳〵ッ、正司樣に違エねエ』と、我れを忘れて喜び勇む。

事が餘りに意表に出たので、さすがの堅策も唯茫然たるばかりであつたが、漸く

に我れに返つて、

『ム、、確かに正司だ。こら甲斐澤ッ魔ケ谿へ陷ちて死んだなぞと、よくも乃公を欺いたなッ』と、目を瞋らす。

『ど、どう致しまして、實際死んだに違ひないので……』と甲斐澤は狼狽する。

『ゆ、ゆ、幽靈ぢやアござんすめエか』と、むさゝびが逡巡する時、早來かゝつた氷室正司は、駒田堅策を見ると其まゝ、よろめきながら近寄つて、

『オ、、汝は駒田だな』と、憤怒の眼にハッタと睨んだ。

〔七〇〕

氷室正司が憤怒に燃ゐる瞳に射られて、强惡無殘の駒田堅策も思はず一歩退つたが、脫れぬところと氣を取直して、

『オ、、汝まだ生きて居たかッ』と、飽迄も弱身を見せぬ。

『天は昭々として信を照す！正司は不思議に助かッた。否、例へいかなる奸策を以て、此の肉體は殺すとも、正司の精神は決して死なんぞッ、況してや心身共に無事だ。嘸汝は意外であらう！駒田、能く聽けッ。正司は一旦魔ヶ谿に陷つたが、乙倉の死骸から密書を得て、汝の非望は悉く知ッた。汝の秘密は悉く此の正司の掌中に握つたのだ！。そうして汝に制裁を加へお兄イ樣やお嫂エ樣の危難を救はう爲め、千辛萬苦して活路を求め、谿底の洞穴を進んで今日其の極點に達したが、一大磐石に阻まれて、進退茲に谷まつた時、天の佑か神の助けか、料らず坑夫に掘出されて、思ひも寄らん鑛山へ拔け、再び天日を仰いだのだ。是によつても天道の誠を照すを思ひ知つて、男子らしく面縛して罪に服せッ』と、正司は色を厲まして喝破した。

『と、とんだ者を堀出したなア』と、むさいびは呆れ果て、正司の嚴かな顏色に怖れを爲す。

駒田は謀全く破れて、遺憾に堪へず唇を嚙み、返す詞もなく正司を睨んで身を

顫はしたが、破れかぶれの甲斐澤が、

『面倒だ、殺つてしまへッ』と、捨鉢に叫んで見たけれどむさいびは始め加擔の惡坑夫も、此の有樣に度肝を抜かれて、再び擊ちかゝる氣力もなく、たゞガヤ〳〵と犇めくばかり。

それに引替へ、芳造は武者振ひしつ勇氣を增して、

『どうだ、これでも御主人へ抵抗をするかッ』芙佐子、光人を後にかこひ、例の鶴嘴を押ッ取り直す。正司も所持の獵銃を構へて油斷せぬ、エスは益々高く唸つて主に引ッ添ひ眼を光らす。

後から來た坑夫どもは何が何やら判明らぬながらも、正司等に理の有る樣子といひ、かねて自分共を殘酷に扱つたむさいびへの怨みもあるので、云合はさねど期せずして一同は、氣前の好かつた芳造へ加勢をする心に成つた。折も好し、此の時麓から駈付けたのは光正伯であつた。

『御前樣だ〳〵』と、多數の坑夫は、從來の慈惠を記して足を翹て喜び迎へた。

『オ、、奥さん光人もよく無事で居つて呉れた』と、光正は滿面に喜色を見はす、芙佐子と光人は、夢心地に取縋り嬉し泣きに泣くのであつた。

『駒田ッ、まだ汝は服罪せぬかッ』と、正司の凛たる聲がひゞくと殆ど同時に、

『駒田さん、もう斷念めてお了ひよッ』と、嬌めく姿を現したのは、思ひもかけぬ菊大和の照葉であつた。

『やッ、お角か』と、堅策は駭目して、

『ムヽ、では汝が何も彼も』と皆まで云はせず、

『お察しの通りです。一旦はお前の詞に乗つて、慾に目が晦れ共謀に成つたが、わたしァ御前樣が可戀く成つて了ッたのサ』

『何ッ』と、駒田は瞋りの眼に睨まへつめる。

『アラ、そんな可怖い顏をしても駄目よ。わたしは立派に懺悔するわ。それから今度は戀に陷ちて、生命掛けで御前樣を思つたのです。さァ然うなるとお前も邪魔なら、申し難いが夫人も邪魔になつて、夫人の寃罪を御前樣に知らせては、わたしの戀も叶はないと、據ろなくお前の惡事も、これまで口には出さなかつたが、ツク〳〵思へば昔から、惡事の榮えた例は無いと、漸く悟りが開いたから、お前の此方へ發つた跡で、洗ひざらひ御前樣へ白狀して斯うしてお供をして來たのです。駒田さん、モウ惡黨らしく往生して了ッちやァ何う?』と、女ながらも悔悟しては詞はすゞしく更に澱まぬ。

其の顏を目戍ッて居た芳造がいそがはしく聲をかけた。

『オ、、ヤッパリ手前はお角だッたな』

『エ?』と、お角は振回つたが、

『ア、、お前は芳さん!』と、唯一言、ありし處女に返ッたか、颯ッと面を赧らめて、

『堪忍して下さいッ』とばかり顏に袖を宛てゝワッと泣いた。

『此の芳造も手前ゆゑに、ドン底まで墮落もしたが、今となつちやァ怨みはねエ、よく手前改心をして、駒田の惡事を御前樣へお打明け申してくれた、芳造改め

て禮をいふ、お角難有てエ』と、芳造は手を合はす、正司は苛立つ聲を勵まして『駒田ッ、さア服罪せエ。お兄イ樣も此の正司も、罪を憎んで人は憎まん、汝も堂々たる男子でないか、悔悟して罪を謝せッ』と、肺腑を貫く語の鋭さ、さすがに膽に應へたか堅策はギクリとしたが

『いゝや、斷じて悔悟は爲ん！乃公は何處までも乃公の心を有ッて逝くのだッ』

最後の一句を壓した拳銃の響は彼れが自ら其の罪惡の一切を葬る告別の聲であつた。

小說　心

井手蕉雨先生作　『許嫁』　全二冊

歌川珖舟先生畫

右の小說は樋口隆文館にて出版して居ります

（終）

◉樋口隆文館
營業案內

△貸本營業の方又は取次販賣
營業の方で樋口隆文館と御取引を開始やうと思はるゝ方は郵券三錢御送り下されば、早速に卸直目錄を御送りいたします。

△樋口隆文館は日本に於ける唯一の貸本向小說專門の卸問屋であります、貸本向の小說なれば東京版でも大阪版でも一切取り揃へて御安くいたします。

△樋口隆文館は自家出版物のみにても現に九百種程所有して居る者ですから安心して御懸念無く御取引を願ひます。樋口隆文館は毎月新版月報を御得意樣へ無料で御知らせ致します。

△樋口隆文館は毎月缺す事なく續々と新版を發行いたします其作者は現代に於ける知名の小說家で加之に內容が面白く口繪が奇麗で其の製本の形式までがすべて貸本向に出來て居ります。

△樋口隆文館の營業場所は大阪市南區三休橋饅谷南へ入西側、振替番號は大阪八七九七

大正八年七月二十七日印刷
大正八年七月三十一日發行

著作者　井手蕉雨
大阪市南區饅谷仲之町二百二十四番屋敷

發行者　樋口源次郎
大阪市西區阿波座中通二丁目四番地

印刷者　荒木佐兵衛

（定價金七拾錢）

著作權所有　無斷轉載
發行所　樋口隆文館
大阪市南區三休橋饅谷南へ入西側
電話南六七九九番
振替口座大阪八七九七番

心

好評傑作小說

樋口隆文館出版

江見水蔭先生著	空中花	全三冊
江見水蔭先生著	金色洞	全三冊
江見水蔭先生著	五人女（大正）	全五冊
江見水蔭先生著	純子	全二冊
島村抱月先生譯	其の女	全一冊
佐藤紅綠先生著	路二つ	全三冊
佐藤紅綠先生著	咲く花散る花	全二冊
佐藤紅綠先生著	夕千鳥	全二冊
井原青々園先生著	迷ひ子	全四冊
渡邊默禪先生著	水の流れ	全二冊
渡邊默禪先生著	魔の笛	全三冊
渡邊默禪先生著	忘れ子	全二冊

□實價各一冊六拾錢□送費各一冊六錢□

全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作で
し全國各地の新聞で多大の好評を博したる物ですから
れを讀まれても至極面白し此目錄の他にも猶數百種あり

好評傑作小說

樋口隆文館出版

小林蹴月先生著	妻の心	全三冊
小林蹴月先生著	秋の空	全二冊
小林蹴月先生著	怒濤の月	全三冊
小林蹴月先生著	灯	全二冊
井手蕉雨先生著	心	全一冊
井手蕉雨先生著	許嫁	全二冊
碧川紅雨先生著	迷ひ	全一冊
米光關月先生著	女相場師	全二冊
行友李風先生著	安宅丸	全四冊
行友李風先生著	龜甲組	全三冊
行友李風先生著	人の怨	全三冊
行友李風先生著	因果經	全一冊

□實價各一冊六拾錢□送費各一冊六錢□

全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作で
し全國各地の新聞で多大の好評を博したる物ですから
れを讀まれても至極面白し此目錄の他にも猶數百種あり

好評傑作小說

樋口隆文館出版

- 涙香小史丸生著 ■指環 全一冊
- 涙香小史先生著 ■眞暗 全一冊
- 涙香小史先生著 ■大盜賊 全一冊
- 涙香小史丸亭小雨先生合著 ■美人の獄 全一冊
- 須藤南翠先生著 ■新妻 全二冊
- 須藤南翠先生著 ■荻江夫人 全二冊
- 遲塚麗水先生著 ■黑髮 全二冊
- 齋藤溪舟先生著 ■八まん橋 全一冊
- 武田仰天先生著 ■深浪 全一冊
- 武田仰天先生著 ■色くらべ 全一冊
- 春風樓先生著 ■藤浪 全二冊
- 春風樓先生著 ■隣り合せ 全三冊

□實價各一冊六拾錢 ◎送費各一冊六錢□
全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作で
し て全國各地の新聞で多大の好評を博し たた物で すからど
れを讀まれても至極面白 し此目錄の他にも猶數百種あり

好評傑作小說

樋口隆文館出版

- 和田天華先生著 ■かくし妻 全二冊
- 和田天華先生著 ■憐れ誰か兒ぞ 全二冊
- 和田天華先生著 ■愛の闘 全三冊
- 和田天華先生著 ■蔭の人 全三冊
- 島川七石先生著 ■亂れ髮 全三冊
- 島川七石先生著 ■胸の火 全二冊
- 島川七石先生著 ■磯うつ浪 全二冊
- 島川七石先生著 ■つきぬ緣 全三冊
- 瑠璃先生著 ■かくし兒 全二冊
- 篠原嶺葉先生著 ■田鶴子 全二冊
- 篠原嶺葉先生著 ■姫百合 全二冊
- 黑法師先生著 ■子もり唄 全一冊

□實價各一冊六拾錢 ◎送費各一冊六錢□
全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作で
し て全國各地の新聞で多大の好評を博し たた物で すからど
れを讀まれても至極面白 し此目錄の他にも猶數百種あり

好評傑作小說

樋口隆文館出版

- 河原紅雨先生著 ■月に叢雲 全二冊
- 河原紅雨先生著 ■母の秘密 全二冊
- 泉鏡花先生著 ■七本櫻 全一冊
- 泉斜汀先生著 ■木遣り 全一冊
- 三木天遊先生著 ■名妓小きみ 全二冊
- 山田松琴先生著 ■怨と情 全三冊
- 山田松琴先生著 ■親こゝろ 全三冊
- 山田松琴先生著 ■思の家 全三冊
- 山田松琴先生著 ■戀衣 全三冊
- 羽樣荷香先生著 ■命 全三冊
- 羽樣荷香先生著 ■男 全四冊
- 羽樣荷香先生著 ■電 全三冊

□實價各一冊六拾錢 郵送費各一冊六錢 □

全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作ですべて全國各地の新聞で多大の好評を博したる物ですから他にも猶數百種あり

好評傑作小說

樋口隆文館出版

- 遠藤柳雨先生著 ■雨後の月 全二冊
- 遠藤柳雨先生著 ■須磨子と千代子 全二冊
- 遠藤柳雨先生著 ■舞ひ風 全三冊
- 小島孤舟先生著 ■春待つ人 全三冊
- 小島孤舟先生著 ■流るゝ星 全三冊
- 小島孤舟先生著 ■野菊の家 全三冊
- 齋藤星瀾先生著 ■將棋嶋 全二冊
- 齋藤星瀾先生著 ■二人の花聟 全二冊
- 齋藤星瀾先生著 ■緣結び 全一冊
- 三品馨園先生著 ■雪間の紅梅 全一冊
- 三品馨園先生著 ■色變化 全二冊
- 三品馨園先生著 ■戀の執念 全一冊

□實價各一冊六拾錢 郵送費各一冊六錢 □

全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作ですべて全國各地の新聞で多大の好評を博したる物ですから他にも猶數百種あり

好評傑作小說

□樋口隆文館出版□

小笠原白也先生著■妹　全一册
小笠原白也先生著■女教師　全一册
小笠原白也先生著■見果てぬ夢　全一册
鹿島櫻巷先生著■戀の敗者　全二册
鹿島櫻巷先生著■海の豪傑　全三册
鹿島櫻巷先生著■梨園情話　全二册
根本吐芳先生著■三人の仇　全二册
根本吐芳先生著■女小說家　全一册
和田天華先生著■戀の意氣地　全二册
和田天華先生著■弱き人　全三册
渡邊默禪先生著■俠妓小鶴　全二册
渡邊默禪先生著■千枝子　全三册

□實價各一册五拾錢圖送費各一册六錢□
全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作で
して全國各地の新聞で多大の好評を博したる物ですから
れを讀まれても至極面白し此目錄の他にも猶數百種あり

好評傑作小說

□樋口隆文館出版□

橋本埋木庵先生著■憐な母と娘　全二册
橋本埋木庵先生著■浮寢鳥　全二册
安岡夢鄉先生著■罪の子　全二册
安岡夢鄉先生著■地獄谷　全二册
安岡夢鄉先生著■肖像畫　全三册
中村兵衛先生著■血染の手巾　全一册
中村兵衛先生著■妻の罪　全一册
小川霞堤先生著■すめる心　全一册
小川霞堤先生著■現代の女　全一册
新田靜灣先生著■富の力　全三册
新田靜灣先生著■戀の淵瀨　全三册
吾竹園先生著■香人形　全二册

□實價各一册五拾錢圖送費各一册六錢□
全部精巧美麗なる口繪附

樋口隆文館より出版せる小說は全部知名作家の苦心作で
して全國各地の新聞で多大の好評を博したる物ですから
れを讀まれても至極面白し此目錄の他にも猶數百種あり

根本吐芳君著　長谷川小信君畫

三人の仇

全二冊
定價各一冊
四十五錢
送料二冊ニ付八錢

本篇は明治年間に於ける、悲壯凄慘なる復讐の事實譚にして、父を殺されし三人の孝子は、情として倶に天を戴き難き其仇を仆さんが爲め、多年千辛萬苦の末、遂に首尾好く其本懷を達せり、その孝心や賞すべくその勇氣や愛すべくその哀情や憐むべし、されど國家の大法は私情の爲めに枉ぐべからず、世にも稀なるこの兄弟の孝子も、禁令を犯せしの罪に問はれて、あはれ空しく刑場の露と消えたり、當時法庭に於て判決書を讀むに當り、何れも嗚咽してその全部を讀み了る能はず、三人迄もその人が代りしと云ふの一事にても此孝子に寄せる裁判官等の同情が甚麽に深かりしかが偲ばれ得る、乞ふ一讀して明治年間に稀有の事實を知られよ。

樋口隆文館發行

小林蹴月先生作　伊藤靜雨畫伯畫（口繪精巧コロタイプ）

悲劇小説

夜半の鐘

全二冊

特價一冊六拾錢宛
送料二冊ニ付八錢
但し内地限り

夜半とも知らず、葉末子は、不圖何者の音にか、見果てぬ夢の腰を折られた。我ながら、平生の我家で寢て居るやうな氣分がしないので、窃と枕を押退けて、薄暗い電燈の灯影で、見るともなしに押退けた枕の紙を見やると、恥かしや涙に濡れた痕がぐッしより。

生憎と常には左して意にも止まらぬ上野の鐘が、今夜に限つて、身にしみ〴〵と胸元から腸へ喰ひ入るやうに沁みわつた……。といふ文句がこの小説の書き出しです、題名からしてしみ〴〵と哀をさふ『夜半の鐘』その内容はまた一層に落涙を催す悲劇小説です。

樋口隆文館發行

須藤南翠先生著　歌川珖舟畫伯畫（原色版口繪頗美本）

悲劇小說　**新妻**　全貳冊

悲劇小說　**荻江夫人**　全貳冊

特價各一冊六十錢宛
送料二冊ニ付八錢
同　四冊ニ付十二錢
但し內地限り

須藤南翠先生は我文壇の元勳宿將にして逍鷗紅露等の諸文傑よりも夙く先驅をなして盛名を中外に識られし當代屈指の老大家である。

本編は南翠先生最近の傑作にして老健益加はれるその非凡の精力をば此一編に傾注せられし會心得意の一大雄編なり、全編二百餘回、前後七ケ月の長きを通じて新聞の讀者數十萬の士女をして同情禁じ難き其女主人公の哀慘悲痛の運命に泣かしめし多涙多恨の悲劇小說にして、數奇に生れ薄運に嫁ぎし可憐の新妻は、誤解に因せる感情の衝突に父母と良人と姑とが相互に和熟せぬその中間に立つてひとり苦き板挾みの身となり、良人に附けば父母に孝ならず、父母に從ふて孝を全うせんか、良人に背く不貞の妻となるを、噫、如何にせん、捨つるも苦し取るも憂し、義理の柵人情の枷、恩と愛との大葛藤の容易く斷ち難きに惑ひ悶ゆる其苦衷の悲哀なるを著者が獨特の妙筆を以て最精細に描寫せしもの。

江見水蔭君作　八幡白帆君畫

中央新聞掲載小說

大正五人女

全五冊
木版手摺極彩色美人畫
挿附
定價各一冊五十錢宛
送料各一冊六錢宛

全五冊一時に御注文の方に限り送料共に特價金貳圓（但し內地限り）

本篇は約九ケ月の長期に亘り、東都中央新聞に掲載せられて空前の好評を博し、中外數十萬の讀者をして心醉歡喜せしめたる一大活劇小說にして實に過去に於ける數多き水蔭先生の作物中にても拔群傑出せる最長の雄篇である。

編中に活現する女の種類には、女優あり、藝妓あり、猛獸使ひの女あり、富豪の奥樣あり、墮落女學生あり、賢夫人あり、薄馬鹿女中あり、淫婦、毒婦、菩薩、夜叉、個々入り亂れて興味深き大活動をなし舞臺の變化幻奇妙怪を極めた、近來稀に見るの面白き活小說である。

伊原青々園先生作　井川洗厓
川上恒茂　雨畫伯畫（手摺木版極彩色口繪入）

事實小説

迷ひ子　全四冊

各壹冊　金五十錢宛
送料四冊ニ付拾二錢
但し内地限り

本編は東京都新聞紙上で大好評を博した探偵實譚です、主人公稲田貞三郎は下野國栃木町の產、兩親並に其姉も共に善良の家庭に長じた可憐無邪氣の一少年なりしに、前世の業報か自然の宿命か、憫むべし九歳の夏、大地震の喜厭と綽號せらるゝ稀世の大賊に誘拐し去られ麻間の蓬草は撓ずも直く朱に混ずれば白砂も赤しで、初はとも知らず導かるゝがまゝに、後には覺りつゝもその境遇に餘儀なくされ、心ならずも邪の路をば辿る放浪の子となり、六度捕はれて猶悛めず六度の破獄を敢行するまで兇猛不敵の大悪黨と化し了れり、噫可驚變化、可嘆墮落、これ境遇の罪か人の罪か、雖然、彼が如斯成り果つる其の二十餘年の生涯中には讀者をして覺えず情動き涙禁じ難き哀艶憫惨の悲劇もあり、自と血沸き肉躍る痛快壯烈の活劇もあり、著者が入神の靈筆に活きて種々雜多の人物がそれぞれに面白き變化と活動を見せる極めて興味多き好事實譚。

米光關月先生作　井川洗厓畫伯畫（口繪精巧コロタイプ大判挿入）

小説

女相塲師　全二冊

實價各一冊六拾錢宛
送料二冊ニ付　八錢
但し内地限り

本編は新聞で大好評を得、劇に仕組まれても亦大當取つた面白い小説です。其荒筋は、東京の芳町で鳴した藝妓で、新桔梗屋の勝子といへば、縹緞のみでなく張も意氣地もあつて、三弦も達者、舞踊も上手、馬術もやれば撃劍もやり、まだ其上に柔術の奥儀さへも極めたといふ一寸類の無い變物であつた。花も盛りの十九の春、慕ふた男に思はれて、その外妾となり内室となり、若後家となり女相塲師とまでなつて、男の爲に操を立て貫いた男まさりの天晴の女と、また此若後家を巧く手に入れて、心中に秘めし十年の戀を遂けんと、陰險狡猾の術策を弄する相塲成金の好色紳士とが、卍字とからみ、巴紋と縺れ、合ふては離れ、離れては合ひ、塲面悲變轉、悲劇となり、喜劇となり、大活劇ともなり、讀者をして通讀覺えず恍惚の境地に入らしむる關月先生會心の傑作です。

大好評新刊小説

江見水蔭君作　八幡白帆君畫

探偵の娘

全二冊
木版彩色畫入美本
定價各一冊四十五錢宛
送料一冊ニ付六錢
二冊ニ付八錢

米國より新歸朝の飛行家と化て、甘々と華族の令孃を弄ばんとする大惡黨あり、外面は如菩薩にして內心は如夜叉なる泥蟹龍子といふ大毒婦あり、猾智の天才眞に驚嘆すべき蛛の子仙太なる惡少年あり、動物の生血を搾り取て戰慄すべき或る秘密の發明に苦心しつゝある怪奇不思議の老異人あり、多數の部下を有して兇猛比すべき無く、其名も恐ろしき黑蛇伴作といふ、土窟に潜める盲目の怪賊あり、著者が獨特なる神奇幽怪の筆は、かゝる人物を隨所に躍動せしめて、以て讀者をして、變幻恍惚の境に遊ばしめん、乞ふ一讀せられよ。

樋口隆文館發行

279
1285

終

大阪
樋口隆文館發行